

# ドイツ語の基本語彙と専門語 予備的考察

大藪 正彦・中村 茉莉

キーワード：基本語彙，専門語，サッカー用語，ドイツ語教育

## 1. はじめに

本稿は、ドイツ語のテキストを理解する際に5000語レベルの学習基本語彙でカバーできない語、あるいはカバーできないものについて考察し、そのうち、特に専門語について、サッカー用語を対象にして行った小規模の調査について報告するものである<sup>1</sup>。

## 2. 基本語彙は万能か

語学教育の分野において基本語彙の策定は言うまでもなく重要である。ドイツ語の語彙の総語数は30万から50万とも言われるが（Duden 2017: 150）、特定の基準によってその語数を縮小し、語彙学習を進めやすくするために策定されるのが学習基本語彙である。基本語彙の策定に対し重視されるのは、一般に頻度の高さ、ジャンルの広さ、現代性などである。できるだけ少ない語数で、できる限り広範なテキストをカバーできる方が望ましい。

以前から知られていることであるが、日常テキストの圧倒的大部分は比較的少数の語で成り立っている。つまり、語彙というのは、極めて高頻度で用いられる少数の語と、あまり使われることのない多数の語から成り立っている。例

---

<sup>1</sup> 本稿は、大藪が1～3節および6節を、中村が4～5節を執筆した。全体の調整は大藪が行った。なお、大藪担当分については、ドイツ語教育ワークショップ「ドイツ語の学習基本語彙と文法」(東北大学, 2020年2月7日)で行った発表「ドイツ語学習基本語彙をめぐって——現状, 課題, 実践」の一部に、中村担当分については、静岡大学卒業論文「ドイツ語の専門語について——サッカー用語に焦点を当てて」(2019年1月提出)の一部に基づいている。

えばKaeding (1898) は、1千万語を越える——手作業としては驚くべき——規模の調査を行っているが、最も頻度の高い3語 (die, der, und) で9.47%のカバー率、さらに上位15語で25.22%、66語で50.06%、320語で72.25%のカバー率となったことを、「驚くべき事実」として紹介している (Kaeding 1898: 54)。このような事実に基づいて、語学教育では基本語彙の習得に力が注がれてきた<sup>2</sup>。

ただし、Kaedingの数字からも見て取れる通り、語の頻度ランクが落ちていくとともにカバー率も落ちていく。現在頻度辞典として最もよく知られているJones/Tschirner (2006) のデータによれば、100万語あたりの頻度が100となるのは848位の語からであり、ちなみにAugenblickである。仮に1万語から成るテキストを読むとすると、その頻度は1、つまりAugenblickが出現するのは1回程度ということになる。Jones/Tschirnerの847位までの語の100万語あたりの頻度を合計すると729335で、そのカバー率は約72.9%になる (Kaedingの結果とはかなり異なる)。以前の語学教育では、この数字が肯定的に捉えられることが多く、例えば基本単語1000語を学習すれば、テキストの70%以上をカバーできるというように紹介されてきた。しかしながら、考えてみればすぐに気づく通り、そこから先をカバーしようとする急に困難さが増すというのもまた事実である。つまり、1万語から成るテキストであれば、約30%の語 (3000語) が1回しか出現しないことになる。

楽観的になれない要素はこれだけではない。近年の語彙教育の研究によれば、70%程度のカバー率ではテキストの理解にはとても十分であるとは言えず、実際には95%以上の語が理解できなければならないという指摘もある (Tschirner 2005)。節をあらため、このことをごく簡単な例で見てみたいと思う。

## 2.1 具体例

次はイギリスのEU離脱を報じるニュースの冒頭部分である。見出しも含め30語から成る。

### (1) Nach dem Brexit ist vor dem Brexit

Die Briten haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die Hängepartie wird weitergehen – mindestens bis Ende des Jahres,

---

<sup>2</sup> 1931年 (昭和6年) には、Kaedingの頻度辞典に基づいたドイツ語単語集が日本で出版されている (竹原/加藤1931)。

wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

(Deutsche Welle Nachrichten 31.01.2020 | 16:15 UTC)

筆者が独自に選定した基本単語5000のリスト<sup>3</sup>と照合しながら、カバーする単語を見てみる。まず500語レベルの単語でカバーできる範囲は次の通りである。カバーできない語を黒く塗りつぶしてある。

- (2) 500語レベル：延べ30語中20語をカバー（カバー率66.7%）

Nach dem [ ] ist vor dem [ ]

Die [ ] haben [ ] die Europäische [ ] [ ] . Doch die [ ] wird [ ] – [ ] bis Ende des Jahres, [ ] aber noch viel länger. ....

500語レベルでテキストの3分の2をカバーしているが、よく言われるように、高頻度の語の多くはいわゆる機能語（Funktionswort）であり、この程度のカバー率では、何が話題になっているのかすら把握できない。以下、5000語レベルの語彙でどこまでカバーできるかを続けて示す。

- (3) 1000語レベル：延べ30語中23語をカバー（カバー率76.7%）

Nach dem [ ] ist vor dem [ ]

Die [ ] haben offiziell die Europäische [ ] [ ] . Doch die [ ] wird [ ] – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

- (4) 2000語レベル：延べ30語中25語をカバー（カバー率83.3%）

Nach dem [ ] ist vor dem [ ]

Die [ ] haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die [ ] wird [ ] – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

---

<sup>3</sup> 大藪 (2015) を参照。頻度リストを出発点としながら、既存の学習語彙リストや独自調査の結果も踏まえ、日本人学習者を想定した順位の補正を行ったものである。リストはWeb上で公開している (<http://moz.la.coocan.jp/wortschatz/>)。

- (5) 3000 語レベル：延べ30 語中25 語をカバー（カバー率83.3%）

Nach dem [REDACTED] ist vor dem [REDACTED]

Die [REDACTED] haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die [REDACTED] wird [REDACTED] – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

- (6) 4000 語レベル：延べ30 語中26 語をカバー（カバー率86.7%）

Nach dem [REDACTED] ist vor dem [REDACTED]

Die [REDACTED] haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die [REDACTED] wird weitergehen – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

- (7) 5000 語レベル：延べ30 語中26 語をカバー（カバー率86.7%）

Nach dem [REDACTED] ist vor dem [REDACTED]

Die [REDACTED] haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die [REDACTED] wird weitergehen – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ....

5000 語レベルで最終的に86.7%のカバー率となった。しかしながら、内容を把握するのは依然困難なままである。冒頭の「公式にヨーロッパ連合を去った」という記述から、イギリスのEU離脱のことが話題になっていることが推測できるが、これは時事的な知識をもとにした推測であり、語の知識に基づくものではないことに注意しておいてよいだろう。また、実際には4000語レベルでのカバー率と変わりがないことも指摘できる。先に述べた通り、70～80%から先は、たとえ1%でもカバー率を上げるのは大変困難になってくる。

## 2.2 何が必要なのか

では、学習語彙の規模を大きくすればよいのであろうか。大きくするとすれば、どの程度大きくすればよいのであろうか。まず学習基本語彙としてどの程度の規模を設定するのが適切なのか考えてみよう。市販の単語集は、一般に80～90%程度のカバー率を目安とし、4000～5000語程度を設定するものが多い。例えば、Jones/Tschirnerは4034語を、Langenscheidt社から出版されているBasic German Vocabularyは4000語を収録する。しかしながら、すでに見た通

り、テキストの十分な理解には、5000語程度では不十分である可能性がある。先に基本語彙とは広いジャンルに現れる高頻度の語であるとしたが、広いジャンルに現れるというのは、言い換えるならば「特殊でない」語であるということである。仮に「特殊でない」語の集合を基本語彙であるとする、その規模はどの程度のものになるであろうか。Ickler (1984: 21)によると、テキストの語が特殊でないものから特殊なものに変わり始めるのは15000語辺りからという見積もりもあるとのことである。また、Duden (2017: 150)によると、ドイツ語母語話者の能動的 (aktiv) な語彙は12000～16000語程度である。そのことを踏まえると、最終的な語彙学習の目標を15000と設定するのも必ずしも的外れでないのかもしれない。しかしながら、実際の学習を踏まえると、この数字はあまりにも非現実的である。5000語という規模が90%近いカバー率を持つのであれば、まずは中級者の目標としてこの数字を設定してもよいのではないかと考えられる。

一方で、語彙学習は単語の数だけが重要なのではないことにも目を向ける必要がある。ここでもう一度、先に例として出したテキストの理解のために何が必要だったのかを考えてみたい (次に再掲)。下線を引いた部分は2000語レベルの語彙でカバーできなかった語である。

#### (8) Nach dem Brexit ist vor dem Brexit

Die Briten haben offiziell die Europäische Union verlassen. Doch die Hängepartie wird weitergehen – mindestens bis Ende des Jahres, wahrscheinlich aber noch viel länger. ……

4点指摘できる。まず1点目は、(der) Brexitのような時事的な語、新語の知識である<sup>4</sup>。近年であれば、類例としてsimsen〈SMSを送る〉, twittern〈ツイートする〉などを挙げることができるだろう。コーパスで見える限り、これらの語はもはや特殊な語だとは言いきれないほどの頻度で用いられている。

2点目は、見出しに用いられている表現である。これは、かつてのサッカードイツ代表監督ゼップ・ヘルベルガー (Sepp Herberger, 1897-1977) による名言 „Nach dem Spiel ist vor dem Spiel“ 〈試合のあとは試合の前〉をもじっている (Duden 2019: 409を参照)。1954年にドイツをワールドカップ初優勝に導いた

---

<sup>4</sup> Brexitは、Dudenの正書法辞典では2017年の第27版から採用されている。

名将は数々の名言で知られており、ほかに „Der Ball ist rund“ 〈ボールは丸い〉なども、「何が起こるかかわからない」という意味でしばしば用いられる表現である。ここでは特に名言 (Aussprüche) の知識が問題となっているが、広い意味での慣用句 (Redewendungen) の知識と言い換えてもよいだろう。

3 点目は、派生語・複合語など、語形成 (Wortbildung) に関する知識である。上例で言うと、Britten という語は 5000 語レベルに含まれないが、britisch という形容詞が 2000 語レベルの語であり、語形成の知識があれば、コンテキストとあわせて意味の推測が可能だと考えられる。ほかに weitergehen も weiter と gehen に分けて考えることによって十分に意味を理解することができる。

最後の 4 点目は、Hängepartie という語の意味と使われ方である。この語は本来チェス用語であり、(日本の将棋で用いられる語をあてると)「指しかけ」という意味である。ここではその語がさらに比喩的に用いられている。この場合は、専門語から一般語への意味の「一般化」が生じている。日本語の例で言えば、「イエローカード」 (= 警告) が日常の場面で使われるような場合を挙げることができる。これは、本来「専門語」であったものが日常語において比喩的に転用されているケースであり、テキストの理解には専門語の知識と比喩の理解が求められることになる。

以上、ごく短いテキストの中でも、語彙学習で考慮されるべき複数の要因を指摘することができた。当然のことであるが、語彙学習においても、多くの語を特定の語義とあわせてただ覚えるという硬直化した学習だけでは不十分であり、語彙の持つしなやかな側面を理解し、柔軟性を持った学習が重要となってくるとのことである。次節以降では、このうち「専門語」に焦点をあて、さらに議論を深めてみたい。

### 3. 専門語とは

「専門語」(Fachsprache) をどのように規定するのかについてはさまざまな考え方があがる。ごく一般的に言えば、専門語とは一般語 (Allgemeinsprache) と対をなすもので、専門的に特殊化された言語のことである。専門語を特殊語 (Sondersprache) の一種とする考え方も見られるが<sup>5</sup>、専門語の多くが実際には言い換えが利かない、つまり決して余分なもの (Dublette) ではないという点

---

<sup>5</sup> 例えば『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店、1994。

は重要である (Ickler 1997: 8)。例えば「刑事」を「デカ」と言うような場合は、ある種の言い換えであるが、ラグビーにおける「ノックオン」「オフロードパス」などでは、簡単な言い換えは不可能である (もちろん説明は可能である)。このラグビーの例からも分かる通り、専門語の見かけ上の「取っつきにくさ」は、それが前提とするもの、つまり——不十分であれば改善可能な——特定の知識や思考法に起因するものである (Ickler 1997: 8)。

さて、専門語の規定をめぐる詳細な議論は別の機会に譲ることにして、本稿では基本語彙との関係に着目して議論を進める。基本語彙というのは、その特性からして多くのテキストに共通の、特殊でない語の集合である。一方、具体的な個々のテキストは、ふつう何か特別なことを伝えるために書かれたり、発話されたりするものである。Ickler (1984: 21) は「テキストの特殊でない90%は、いわば、内容に富んだ10%を際立たせる背景のようなもの」と述べている。前節で見た通り、この10%を理解できなければ、結局のところテキストを理解することは難しい。では、専門語は基本語彙とはまったく無関係に存在し、学習者としてはただ覚えるしかないのだろうか。もちろんそうではない。実際には日常で用いられている語が専門的な意味に特化されて用いられている場合も多い。例えば、化学者にとっての「水」、宗教学者にとっての「水」などの例で考えてみるとよい。専門語を専門語たらしめている要因の一つは、特定の「観点」(Aspekt) である。では、実際の専門語は基本語彙とどのように重なり合い、そして異なっているのか。それについて次節以降、サッカー用語を例に詳しく見ていきたい。

#### 4. ドイツにおけるスポーツ用語・サッカー用語

本節以降、スポーツに関する専門用語、特にサッカー用語を取り上げる。Born (2009) はスポーツの専門語が発展した歴史的経緯について述べている。Bornによると、すでに紀元前3000年には中国で球技が行われていたことが知られており、古代ギリシアのオリンピアの種目や、トレドのアルフォンソ10世の宮廷で書き残されたチェス、狩猟、馬の飼育などといった様々な記録、スペイン宮廷で観客を前に披露されたマヤ族とアステカ族の球技、さらに中世末期から近世の初め以来流行したフランス由来の馬上試合など、身体活動という意味でスポーツの記述は古くから存在し枚挙にいとまがない。19世紀のイギリスでスポーツは大いに発展することになり、様々な種目が世界に広まった。1896年に

再開されたオリンピックもこれに資することになる。今日スポーツは我々の日常生活の欠かせない一部分であるというだけでなく、商業的に利用されることで巨大な産業や経済、さらには政治にも大きく関わっている。

ドイツで言語学との関わりが意識されたしたのは、一方では用語リストや用語集編纂の必要からであり、他方ではスポーツにおいて日常的に使用される語彙から外国語の要素を排除しようとする意図からであった (Born 2009: 12f.)。ドイツにおいてイギリスからサッカーを導入したのはブラウンシュバイクのギムナジウム教師 Konrad Koch という人物で、彼がドイツにおけるサッカー用語の翻訳やルールの制定に大きく貢献している。1875年 Koch がサッカーの規則を記した小冊子を出版したことでドイツ語のサッカー用語も生まれることになった。サッカーがドイツに渡った時代はナショナリズムが高まり出した時代とも重なり、いわゆる「言語浄化」が試みられ、特にフランス語と英語からの借用語は避けることが望まれていた (Burkhardt 2008: 71)。Koch もこの流れに漏れず言語純粋主義的な考えを明らかにし、いずれのサッカー協会、連盟、連合からも英語の表現を排除することがサッカーをするのに望ましい状態であると述べている (Koch 1903: 171)。しかし Koch が提案したドイツ語の用語がすべて定着したわけではない。Koch がはじめにドイツに導入したのは現在の形のサッカーよりもむしろラグビーに近いものだったようで、ラグビーに関連した用語も Koch はドイツ語に翻訳していくつか提案しているが、それらのラグビー用語は受け入れられなかった。例として英語の scrummage 〈スクラム〉に対する Gedränge や、touch down 〈タッチダウン〉に対する Handauf, penalty-goal 〈ペナルティゴール〉を翻訳した Straftor などが挙げられる。また Spielwart 〈英: captain〉や treiben 〈英: dribble〉, anständig, ehrlich 〈英: fair〉などの場合は、結局本来の英語の方に押し戻される形となった。今日のサッカー報道などでも Trainer, Coach, Hattrick といった英語の用語が頻繁に見られる (Burkhardt 2008: 73)。

## 5. 語彙調査

サッカー用語と一般的に使われる語の間にはどの程度の差異が認められるのだろうか。Born (2009: 15) は Sportsprache の特徴を 7 つ挙げ、その中でスポーツファンがスポーツをする際もしくはスポーツに関して話したり書いたりする際に使うことばをスポーツ用語と考え、スポーツファンは人口の様々な社



会階層から構成されているため、極端に専門的な語は多くはないと述べている。Bornの主張する通りであるならば、サッカー用語の多くは基本語彙に近いものであるはずである。この予想のもと、サッカーの文献で使用される語彙と基本語彙を比較し、両者の差を検証する。また基本語彙との結びつきの観点からサッカー用語の分類を試みる。

## 5.1 調査方法

調査方法は学術用語の国際比較を行った国立国語研究所（1981）を参考にした。すなわち、調査対象分野の専門用語集から無作為に100の見出し語を取りだし（本稿の調査では、ExcelのRAND関数を利用した）、外国人学習者向け辞書などの基本語彙リストと照らし合わせ重なり具合を調べるという方法である。使用した語彙リストは以下の二つである。

Kicktionary 掲載サイト [www.kicktionary.de](http://www.kicktionary.de)

Jones, R./Tschirner, E. (2006): *A Frequency Dictionary of German*.

サッカー用語は上記のKicktionaryから取り出した。Kicktionaryはインターネット上で公開されている電子媒体の独英仏三言語のサッカー用語辞典である。Institute für Deutsche SpracheのThomas Schmidt氏が2005年から2006年にかけて作成した。このプロジェクトの主な目的は、語彙意味論に関する言語学理論、コーパス言語学の方法論、ハイパーテキストとハイパーメディアの技術、およびコンピュータの言語処理技術を利用し、これらがどのように伝統的な紙の辞書よりも優れた用語集を作成するのに役立つかを解明することに置かれている。しかし氏が作成したコーパスでドイツ語のサッカー用語が相当数収集され、辞書という形で公開されていることから本研究の調査に利用することにした。コーパスはUEFA公式サイトに掲載されていた記事からドイツ語、英語、フランス語の書き言葉を収集し、ドイツ語についてはさらにサッカー専門誌kicker公式サイト、ブンデスリーガに関するラジオコメントからも標本を集め作成された。その結果ドイツ語100万語、英語、フランス語はそれぞれ30万語の信頼できる実例が集まっている。辞書の形成にあたって見出し語とされたのはドイツ語792、英語599、フランス語535だが、今回はドイツ語の見出し語792から100語を取り出すことにした。なお、Kicktionaryについて詳しくはSchmidt（2009）を参照のこと。

比較するドイツ語の基本語彙リストとして Jones, R. / Tschirner, E. (2006) を選んだ。これは420万語のドイツ語均衡コーパスを利用し4034の見出し語を頻度順にリスト化したもので、ドイツ語話者が一般的に使用する語彙が列挙されている。従来の独英辞典というよりも外国人学習者の教材となることを意図して作成されたことから、十分に基本的な語彙が挙げられていると考えてよいだろう。

取り出したサッカー用語を Jones/Tschirner のリストと比較し、リストに含まれていればその用語は基本的な語であり、一般的に使用され多くの人にとって分かりやすいものであると考えることができるだろう。国立国語研究所 (1981) ではこれを「意味づけ」と呼んでいる。「意味づけあり」であればその用語が基本語彙に含まれており、「意味づけなし」であれば基本語彙に含まれていないということであるが、本稿でもこの「意味づけ」という用語を使用する。以下に詳細な判断の基準を示した。

1. 「意味づけ」は全体としてのものと部分としてのものに分けた。例えば Startformation のような複合語は Start-formation と考え、Start のみが基本語彙に入っているため部分として「意味づけあり」と数えた。Trainerbank などは Trainer と Bank がどちらも基本語彙に入っているため、全体として「意味づけあり」の例である。また indirekter\_Freistoß や des\_Feldes\_verweisen といった句で見出し語となっている場合は indirekt, frei, Stoß, もしくは der, Feld, verweisen がそれぞれ基本語彙の中に入っているか参照し判断した。これらの語が複合語であるのか、複合語であるとすればどこで区切るのがふさわしいのかについてはその都度辞書などを参考に判断した。
2. sich\_erarbeiten とした再帰代名詞と動詞が同じ見出し語となっている例は sich と erarbeiten の両者を調べ全体として「意味づけあり」と判断したが、sich のみが基本語彙にある sich\_verzetteln の場合は「意味づけなし」とした。
3. 動詞から派生した Angreifer とした男性名詞は、動詞 angreifen が基本語彙に含まれたが、Jones/Tschirner (2006) ではこれらの語を区別しているため「意味づけなし」とした。
4. Mann の複数形 Mannen が見出し語に取られていたが、この場合の Mann は家臣や家来といった意味で、サッカーの文脈の中で使用されると複数形でチーム全体を指すことがある。一般に使われる複数形 Männer とは異なる

が、単数形Mannは基本語彙に含まれるため、部分として「意味づけあり」と判断した。

## 5.2 調査結果

以上の基準でサッカー用語100語を分類した結果、内訳は次の表1のようになった。

表1：Kicktionary100語の意味づけ

|               |    |
|---------------|----|
| 全体として「意味づけあり」 | 44 |
| 部分として「意味づけあり」 | 15 |
| 「意味づけ」なし      | 41 |

なお、klärenは見出し語が2つKicktionaryに取られていたため、一方を削除して101番目の見出し語Rechtsaußenを追加し基本語彙と比較した。

半数近くが全体または部分として「意味づけあり」、すなわちサッカー用語の多くが基本語彙と結びついており分かりやすい語であるという結果になった。しかし「意味づけなし」の見出し語が100のうち41である点を見ると、予想していたよりもドイツ語のサッカー用語は基本語彙とは結びついていないとも言える。ここで比較のために日本語のサッカー用語を見てみたい。調査は古くなるが、国立国語研究所（1981）では、日本放送協会『放送のためのスポーツ辞典』（1957～1964）を使用して日本語のスポーツ用語の語種を調査している。その結果は、掲載されていた290語のうち和語が2（全体の0.6%）、漢語15（1.1%）、外来語253（87.2%）、混種語20（6.9%）である<sup>6</sup>。以上から日本語のサッカー用語は外来語の比率が非常に高いことが分かる。あわせて日本で出版されている別のスポーツ用語辞典<sup>7</sup>を参照したが、現在でもやはり日本語のサッカー用語のほとんどは外来語であり英語からの借用である。「イエローカード」の「カード」や「壁」といったごく少数の語彙以外はほとんど一般語とは縁がないだろう。サッカーという種目が主にイギリスから入ってきたものであり、

<sup>6</sup> 混種語のうちわけは和漢3，和外2，漢外14，和漢外1。

<sup>7</sup> 『最新観戦必携/すぐわかるスポーツ用語辞典』学習研究社，1998など。

日本とドイツが時期は大きく違うとはいえ、同じくサッカーを外国から取り入れているにもかかわらず、用語の面でこれほど大きく差が現れ、ドイツ語のサッカー用語の大半が基本語彙と結びついた分かりやすい語であるのはドイツサッカーの父と呼ばれる Konrad Koch の功績と言って良いだろう。

ただしこの用語調査の結果には大きく二つの問題点があることを断っておかねばならない。第一には、792語の中から100語を抽出し4034語と比較するため、当然取り出されたサッカー用語の多くが基本語彙の中に入っていることが予想される。第二に、Anschluss を例に挙げると、辞書の上では「接続、結びつき」といった意味が最初に挙げられているが、サッカーの文脈では主に「追い上げ」という限定された意味で使用される。このように基本語彙の多くが多義的に使用され、一般に使われているのとはやや異なる意味を持ってサッカー関連文脈に登場していることも多いと考えられるため、「意味づけあり」と言っても程度問題であると言える。この点に関して、国立国語研究所(1981: 42ff.)に次のような説明がある。ヨーロッパの言語における学術用語が日本語よりも「分かりやすい」、すなわち多くが基本語彙と結びついているのは、日本語が外来語や漢語を取り入れたことで多義語として発展できなかったためであり、反対にヨーロッパの言語では多義語が多いというものである。この説明を検証するための調査は本稿では特に行わないが、多義語が多いという特徴がドイツ語にもあるとすれば、その特徴は学術用語だけでなくサッカー用語にもある程度影響を及ぼしていると考えられるだろう。この点を踏まえて次節では調査した見出し語100の分類を試みる。

### 5.3 サッカー用語の分類

本節の分類は5.2で調査した見出し語100を4つのグループに分けたものである。サッカー用語のすべてを検証したわけではないためこの分類に当てはまらない用語が存在する可能性は十分にあるが、多くはこの分類に入ると考えている。

- (a) ほぼスポーツやサッカーの文脈のみでしか使われない一義性を持った語  
Glanzparade <<(ゴールキーパーの) ファインセーブ>>  
schlenzen <フリックする(反動をつけずに足首だけを使って蹴る)> など

これらの語は一般的な文章で使用されることはないため、基本語彙には含まれない。

(b) 基本語彙からなる複合語

Trainerbank <(監督の座る) ベンチ> < Trainer <監督>, Bank <ベンチ>  
Torgelegenheit <ゴールチャンス> < Tor <ゴール>, Gelegenheit <チャンス>  
など

これらは基本的な語彙から新たな用語を形成しているタイプで、サッカー用語はこのように言語の経済性を利用して作られた複合語がある程度含まれている。

(c) 多義性を持つ語

ersetzen <代替する, 交換する, 補償する/代わりにプレーする>  
lang <(空間的・時間的に) 長い/ (パスが) 長い, (ポストが) ファーサイドの>  
zurückliegen <…前のことである/負けている>  
verziehen <ゆがめる, 転居する, 育て損なう/蹴り損なう> など

スポーツやサッカー関連の文脈では限定的な意味で用いられる用語。上の4例のうち, ersetzen, langの2例は非常に基本的な意味を持つため基本語彙に含まれるが, zurückliegen, verziehenの2例はおそらくそもそも使用する場面が少ないために基本語彙には入らなかったと考えられる。このように多義語が専門的な文献で使われると一般的な意味とは若干ずれることもあることがサッカーの場面でも確認された。

(d) 比喩的に使用される語

Angriff <攻撃/ (ボールを奪うための相手選手への) アタック>  
Truppe <部隊/チーム>  
schießen <撃つ, 発砲する/シュートする> など

上の(c)の下位タイプと見なすこともできる。すでに様々に指摘されているように、球技においては戦争に関するメタファーが使用されることが少なくない。サッカー用語はその代表的な例である。勝敗をめぐる二つのグループが争うこと、またその際肉体的な力が大きな役割を持っていることを強調するからである (Burkhardt 2008: 76)。例に挙げた3例のうちAngriffは基本語彙には入らず「意味づけなし」だがTruppeとschießenは全体として「意味づけあり」である。

## 6. おわりに

本稿では、まず基本語彙によるテキストカバー率の観察から出発し、何が基本語彙でカバーできて、何がカバーできないのかについて考察した。その後、「専門語」に着目し、サッカー用語を対象としてその特徴を分析した。サッカー用語の多くは基本語彙に含まれる語から作られるか、もしくはそれらの語が多義的に使用されている。本文中でも述べたが、語彙学習においては、語の数を増やすことだけにとらわれず、語彙のしなやかな側面を認識し、語形と語義の結びつきに対して柔軟な考え方を身につけることが重要だと考えられる。なお、本稿で取り扱ったのはスポーツ用語の中のサッカー用語という限られた領域である。専門語については今後も実証的な分析を進めていく必要がある。

## 参考文献

- Born, Joachim (2009): Vom Stufenbarren in die Halfpipe. Die deutsche Sportsprache im historischen Wandel. In: Armin Burkhardt/Peter Schlobinski (Hg.) *Der Sport und seine Sprache. Flickflack, Foul und Tsukahara*. Mannheim: Dudenverlag, 10-33.
- Burkhardt, Armin (2008): Wenn das Leder im Kasten klingelt ... Der deutsche Fußball und seine Sprache. In: *Aspekte der Studienvorbereitung und Studienbegleitung*. München: Indicium, 68-87.
- Duden (2017): *Die deutsche Rechtschreibung*. 27. Aufl. Berlin: Dudenverlag.
- Duden (2019): *Zitate und Aussprüche. Herkunft, Bedeutung und aktueller Gebrauch*. 5. Aufl.
- Ickler, Theodor (1984): *Deutsch als Fremdsprache. Eine Einführung in das Studium*. Tübingen: Niemeyer.
- Ickler, Theodor (1997): *Die Disziplinierung der Sprache. Fachsprachen in unserer Zeit*. Tübingen: Narr.
- Jones, Randall L./Tschirner, Erwin (2006): *A Frequency Dictionary of German*. London: Routledge.
- Kaeding, F. W. (1898): *Häufigkeitswörterbuch der deutschen Sprache*. Steglitz: Selbstverlag des Herausgebers.

- Koch, Konrad (1903): *Deutsche Kunstausdrücke des Fußballspieles*. In: *Zeitschrift des allgemeinen deutschen Sprachvereins* 18 (6), Sp. 169-172.
- 国立国語研究所 (1981): 『専門語の諸問題』 秀英出版.
- Langenscheidt (1991): *Basic German Vocabulary*. Berlin: Langenscheidt.
- Nation, I. S. P. (2001): *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大藪正彦 (2015): 「日本人学習者のための、頻度に基づくドイツ語基本単語 5000——概要, 検証, 展望」『人文論集』(静岡大学) 66 (1), 117-135.
- 大藪正彦 (2018): 『サッカーを楽しむドイツ語』 三修社.
- Schmidt, Thomas (2009): Kicktionary. In: Armin Burkhardt/Peter Schlobinski (Hg.) *Der Sport und seine Sprache. Flickflack, Foul und Tsukahara*. Mannheim: Dudenverlag, 117-132.
- 竹原常太 (監修)／加藤一郎 (譯) (1931): 『獨・日・英對譯獨逸基本單語』 大修館書店.
- Tschirner, Erwin (2005): Korpora, Häufigkeitslisten, Wortschatzerwerb. In: Antje Heine/Mathilde Henning/Erwin Tschirner (Hg.): *Deutsch als Fremdsprache. Konturen und Perspektiven eines Faches*. München: Iudicium, 133-149.